

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成26年6月18日現在

機関番号：34310
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2010～2013
課題番号：22730616
研究課題名（和文） 「現実 - 潜在」関係に関する思想史的研究 —ホリスティックな知の再検討
研究課題名（英文） A Philosophical Study on the Concept of Actuality and Potentiality. Reconsideration of the Holistic Knowledge
研究代表者 小野 文生（ONO, Fumio） 同志社大学・グローバル地域文化学部・准教授 研究者番号：50437175
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）3,000,000円、（間接経費）900,000円

研究成果の概要（和文）：近代教育思想の認識論的枠組みを検討するために、能力や潜在性といった概念の近代的把握に再考を迫り、表層的・断片的な知の理解とも認識の神秘化とも異なる「ホリスティックな知」の意義を明らかにすることを試みた。その際、(1) ユダヤ思想、(2) 世紀転換期の「科学と神秘」思想、(3) 近現代の様相論という3つの思想史の軸を定め、それぞれの軸において「現実 - 潜在」関係をめぐる思想の再構成と分析をおこなった。

研究成果の概要（英文）：The aim of this research was to clarify the significance of the Holistic knowledge which is neither superficial-fragmentary recognition nor cognitive mystification. This research also tried to reconsider an epistemological framework in modern educational thought through reflecting on the modern way of conceptualization of 'ability' and 'potentiality'. For these purposes, we reconstructed and analyzed the thoughts on the relation between 'actuality and potentiality' in (1) Jewish thought, (2) 'scientific and mystic' thought at the turn of the 19th Century, and (3) modern thought of modality.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：教育思想、ホリスティック、ユダヤ思想、世紀転換期、神秘主義、京都学派、ゲシュタルト、潜勢力

1. 研究開始当初の背景

(1)近代教育学の主要概念としての「現実と潜在」:

近代教育学において、「現実」と「潜在」は鍵概念であり続けてきた。たとえば、子どもの「現実」に即して教育は行われるべきだといわれ、それゆえにこそ教育学の英知はその「現実」の解明に向けられてきた。また教育学は、子どもの「潜在力」を見抜き、その「潜在性」への働きかけを教育者に必須の能力として規定し、潜在的能力の開発とそれを可能にする教育技術の精緻化に心血を注いできた。したがって、発達・成長・生成・変容など人間の変化・変容を語る教育言説・教育理論は、「潜在から現実へ」という現実化のプロセスを語り、理論化しようとするものだと思えることもできよう。

(2)科学化・汎用化・精緻化の追求がもたらした帰結:

ところで、19世紀以降の学校教育システムの発展と教育技術の精緻化の過程のなかで、子どもの「現実」を正確に理解し「潜在力」を見極める教師の力量を科学的・合理的に方法化し、それを一般化可能なものとして定式化し、一定期間中に学習可能なものとしてカリキュラム化する努力がなされてきた。しかしその努力ゆえに、逆説的にもそこでは「可視的なもの」「方法論化可能なもの」「操作可能なもの」のみが取り扱われ、「不可視なもの」「術理的なもの」「偶然的なもの」はしだいに排除されていった。

(3)近代教育学の陥穽:「科学か神秘か」という二極分解へ:

こうして、「現実」や「潜在」に関する「知」

が実証科学的に説明可能なもの、エヴィデンス・ベースドなもののみ限定され、そこからはみ出るものはたんなる「信仰」のごときものとされていった。つまり、一方で「潜在」はたんなる実証科学的知の超越論的前提として無批判に前提されるだけであり、他方で、実証できない「潜在」を見抜きつつそこへ働きかける大人・教師の「眼力」は、不可思議で名人芸的な「神秘性」として語られるという、「科学と神秘」や「知と信仰」の二極化が生じた。それにともなって、とりわけ「潜在性」の貶下と掘り崩しが進行し、同時に「現実」理解も皮相なものへ陥っている。さらにまた、「見えないものをいかに見るか」「形なきものの形をいかにとらえるか」という、「現実 - 潜在」関係に密接にかかわる問いは、重要であるにもかかわらず十分に検討されていないという状況がある。

(4)ホリスティックな知の可能性：「現実 - 潜在」関係の別様のあり方の探究のために：

このような状況を打開する方策を見出すことは容易ではないが、現在とは別様の「現実 - 潜在」関係の可能性を思想史的に掘り起こす作業がひとつのヒントを提供してくれるはずである。近代化のなかで「現実 - 潜在」の分断化を生んだ諸要因を思想史的に把握すると同時に、「見えないもの」や「形なきものの形」を損なわずに全体論的に把握する作法、人間をトータルかつホリスティックに理解するような知の伝統の掘り起こしが求められている。

2. 研究の目的

以上のような状況を受けて、本研究は、近代の人間理解や近代教育学における「科学と神秘」「知と信仰」の二極分解や「現実」と「潜在」の皮相的・道具的理解によって失われた知の伝統を再発見し、「ホリスティックな知」を組み込んだ新たな教育学と生の全体性に基づく人間理解の創成へつなげてゆくことを目的とする。その際、「現実 - 潜在」関係という観点から教育学の認識論的枠組みを再構成することで、能力や潜在性といった教育概念に対する近代的把握に再考を迫り、表層的・断片的な知の理解とも認識の神秘化とも異なる「ホリスティックな知」の構造の解明に寄与することを狙いとする。そのために、本研究は思想史的アプローチによって次の3つの軸を設定する。

(1) 近代のユダヤ思想・哲学のアクチュアリティを測定する。

「見えないものをいかに見るか」「形なきものの形をいかにとらえるか」という問いは、とりわけ偶像崇拝を禁ずるユダヤ思想の伝統において彫琢されてきた。『我と汝』など

でホリスティックな知のあり方を論じた Martin Buber、言語やイメージのアレゴリー的認識の可能性を論じた Walter Benjamin、観念にはそのまま「現われないもの」としての他者という思想から西洋近代を批判した Emmanuel Levinas らの思想を比較検討しつつ、その可能性の中心を論じる。

(2) 世紀転換期の多様な思潮の動向を追い「科学と神秘」の分断／統合の道筋を把握する。

上述の人々が生きて活躍した「世紀転換期」(ウィーン／ベルリン／パリ)は論理実証主義、現象学、精神分析、ゲシュタルト心理学など史上まれにみる特異な思潮を生み出した。それらを「科学と神秘」をめぐる知の転換期と見立て、実証科学と神秘主義という相反する二つの運動がともに流行した状況の思想的基層を再検討する。

(3) 「様相論」の思想史的系譜を辿り、理論的布置を作る。

スピノザ、カント、ブーバー、九鬼周造、ドゥルーズ、アガンベンらの議論を様相論の観点から読解し、近代から現代思想における「現実と潜在」をめぐる論理的布置を描くべく整理する。

3. 研究の方法

本研究は、「現実 - 潜在」関係という視角から近代教育学を再検討するというテーマ設定のもとで、(1)ユダヤ思想、(2)世紀転換期の「科学と神秘」思想、(3)様相論の思想的系譜という3つの研究対象の軸を作り、思想史的手法によって研究する。それぞれの軸と、具体的な検討事項を以下に列挙する。

(1)ユダヤ思想の軸：

マルティン・ブーバーの対話哲学に見られる「現実化」概念の思想解釈、および全体的でホリスティックな認識に関する理論的検討。ベンヤミンのアレゴリー的思考の解釈・検討。象徴形式(カッシーラー)や図像学(ヴァールブルク)ら同時代思想との関連性の分析。レヴィナスの無限概念とその知解可能性に関する思想の検討。

(2)世紀転換期思想の軸：

神秘主義の思想的検討。オカルト・密儀信仰・神秘主義の流行現象の歴史分析。ゲシュタルト心理学、ウィーン芸術史学派、マッハ感覚論のインパクトの思想史的調査。ゲーテ再評価の文脈と形態学的思想の分析。

(3)様相論の思想的系譜の軸：

九鬼周造の偶然性・潜在性の思想とスピノザ、カントの思想関連を分析。ドゥルーズに

における潜在性概念の分析。アガンベンの潜勢力の思想の現代的意義の分析。

4. 研究成果

2010年度は、(1)「ユダヤ思想」と(2)「世紀転換期の思想」に重点を置いて研究を遂行した。(1)については、ブーバーのDialogの哲学を取り上げ、その「現実化」概念、「潜勢力」の思想に着目しながら、全体的でホリスティックな認識の分析にあてた。併せて、ドゥルーズやアガンベンなど現代思想における「潜勢力」の思想に関する文献の読解を進め、「現実-潜在」思想の現代的展開を追うことに努めた。また、ドイツ・ブーバー学会(ヘッペンハイム)に参加し、ブーバー研究の国際的動向を把握することができた。さらに、レヴィナス『困難な自由』をめぐる国際学術会議(トールーズ)に参加することで、レヴィナス哲学における「顕れるものと顕れえぬもの」をめぐる思想の今日的到達点を測定し、かつ国際的論議の動向をリサーチすることができた。(2)に関しては、世紀転換期の精密科学や実験心理学の興隆のさなかにゲシュタルト心理学が登場してくる背景を探りながら、反-要素還元主義の認識理論の系譜を追うべく文献調査を行った。さらに、(1)と(2)の総合的研究視座として、ブーバーの聖書解釈の思想におけるゲシュタルト的認識の重要性を発見し、「宗教と科学」の両者をつらぬく大きな思潮としてゲシュタルト的な「全体」の把握という課題がどのように理解され、また展開したかを明らかにした。萌芽的成果の一部を、同志社大学一神教学際研究センター主催シンポジウム、京都ユダヤ思想学会、教育思想史学会などで発表した。

2011年度は、(1)に関してはフランス・パリで開催されたレヴィナス『全体性と無限』刊行50周年記念国際学術会議に参加し、レヴィナス研究の動向をリサーチするとともに、関連研究文献・資料の収集をおこなった。また同様の趣旨のもと、ストラスブール大学のG・ベンスーサン教授を招聘して講演会「レヴィナスの作品におけるナアセー・ヴェニシューマー」と共同討議(合田正人氏・杉村靖彦氏・西山達也氏)をおこない、さらにレヴィナス『全体性と無限』刊行50周年記念シンポジウム「レヴィナス哲学とユダヤ思想」(京都ユダヤ思想学会)を本科研と共同で開催し、70名を超える参加者を得て、ユダヤ思想の観点からレヴィナスに切り込む多様なパースペクティヴの在りようについて議論をすることができた。(2)に関しては、世紀転換期の思想が京都学派においてどのように受容され、どのような展開を見せていたかという視点を導入することで、(2)世紀転換期の「科学と神秘」思想の同時代的展開と(3)様相論的思想の視点を交叉させつつ研究するこ

とができた。とりわけ、ブーバーとベンヤミンの対立をメシアニズムの時間、神秘主義、弁証法という観点から考究すべく、西田幾多郎と彼への批判言説という同時代的現象を参照軸として分析した。西田など京都学派の思想における「形なきものの形」の諸相を微細に読み解くとともに、ブーバーにおけるゲシュタルト認識への強い問題関心、特有の弁証法的契機、「境界のラディカリズム」という思想原理をある程度明らかにすることができた。いずれも、成果の一端を京都ユダヤ思想学会、西田哲学会ほかで公表した。

2012年度は、(1)に関してはイスラエル・ヘブライ大学で開催された国際シンポジウム「Interpretations of Traditions: Maimonides, Spinoza, Buber, Levinas and the After」にてブーバーに関する研究発表をおこない、イスラエルのユダヤ学研究者と討議および意見交換をするとともにイスラエル国立図書館にて資料・文献調査をした。また、ドイツのヘッペンハイムのブーバー学会およびハイデルベルク・ユダヤ学大学にて開催された国際会議「50 Jahre Martin Buber Bibel」へ参加し、ブーバー聖書翻訳に関する最新の研究動向を調査できた。いずれの会議でも国際専門学術誌への寄稿を依頼されるなど、今後の研究の進展に向けて足がかりを得ることができた。また、レヴィナスやベンヤミンに関する文献読解もあわせておこなった。(2)に関しては引き続き関連文献を分析し、その成果の一端を教育思想史学会のコロキウムに反映させた。(3)に関しては京都学派、およびアガンベンの読解を通じて考察を進めた。さらに、「現実-潜在」関係をめぐり知の現代的展開、およびその教育思想的文脈における意義に関しては、教育哲学会でのコロキウムや国際会議において、ここまで得られた知見の一端を発表し、討議の場で批判的検討を行うことができた。

2013年度も引き続き3つの軸それぞれについての研究を進めた。また、アガンベン『思考の潜勢力』をはじめとする潜勢力の思想を研究対象に据えたが、これは上記3つの研究軸をつなぐ重要な蝶番となった。イスラエル国立図書館およびヘブライ大学ブーバー文庫、ベルリン・フンボルト大学図書館グリム・センター、カッセル大学文書館などにおいてユダヤ学関連文献、世紀転換期思想関連文献の調査および国際的研究動向の把握に努めた。特に、ブーバー文庫およびカッセル大学でのブーバー=ローゼンツヴァイク聖書翻訳成立過程に関連する書簡や文書を調査できたことは、本研究期間終了後の研究の継続にとって有意義なものとなった。これらの研究成果の一端を、教育思想史学会でのコロキウム、京都大学での京都学派をめぐる国際シンポジウム、教育哲学会のシンポジウム、

同志社大学・明治大学の共催シンポジウム、およびイスラエル・ヘブライ大学における国際コロクなどで発表した。また特筆すべき成果として、ドイツにおいてブーバー＝ローゼンツヴァイク訳聖書完成 50 周年を記念して出版された著作(共著)に、本研究の成果による寄稿論文が収録された。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 16 件)

- ① 小野文生 (2014) 「哲学と翻訳のサブジェクト、あるいは自分自身の言語においてどうもること——和辻哲郎「日本語と哲学の問題」再考」。京都大学大学院教育学研究科臨床教育学講座編『臨床教育人間学』第 13 号、査読有、(印刷中)。
- ② Ono, Fumio (2014) On the “Ordinary” Style of Philosophy and the Tradition of the Kyoto School: A Sketch of Clinical Philosophy and Clinical Education. 京都大学大学院教育学研究科臨床教育学講座編『臨床教育人間学』第 13 号、査読無、(印刷中)。
- ③ 小野文生 (2014) 「もろい部分にたつ教育哲学——パトスの知からシステム化／脱システム化の二重運動を考える」。教育哲学会編『教育哲学研究』第 109 号、査読有、(印刷中)
- ④ 小野文生 (2014) 「イオニアからキョウトまで?——和辻哲郎「日本語と哲学の問題」と哲学のサブジェクト」(コロキウム 2 「『自己を超えて』——哲学のサブジェクト転換 齋藤直子、ポール・スタンディッシュ、飯田隆、小野文生、三澤紘一郎)。教育思想史学会編『近代教育フォーラム』第 23 号、査読無、(印刷中)。
- ⑤ Ono, Fumio (2014) “Reading Kafka Certainly Cannot Be Called a Pleasure”: Martin Buber’s Way of Loving for an Unredeemed World. Ada Taggar-Cohen (ed.) *Proceedings of the Second International Symposium of the Project of Young Scholars “Theocracy” and “Nation” in Jewish Thought: Past and Present*, CISMOR / Doshisha University (February 20, 2014), 査読無、25-35.
- ⑥ 小野文生 (2013) 「伝承の危機と救いなき世界への愛——カフカを読むベンヤミン・ショーレム・ブーバー」。アダ・タガー・コヘン編『国際シンポジウム：ユダヤ思想における伝統の理解とその展開——マイモニデス、スピノザ、ブーバー、レヴィナスとその後』(同志社大学一神教学際研究センター)， 査読無、30-46.
- ⑦ 小野文生 (2013) 「ポイエーシス、弱い思考、イバボロジック——ハイデガーとレヴィナスと共にスタンディッシュ『自己を超えて』を考える」。ラウンドテーブル 3 「教育としての哲学」の条件——ポール・スタンディッシュ『自己を超えて』をめぐって」(齋藤直子・渡邊福太郎・丸山恭司・小野文生・朱燁・今井康雄)，教育哲学会編『教育哲学研究』第 107 号、 査読無、224-226.
- ⑧ 小野文生 (2013) 「Wissenschaft の領土化の〈際〉をまなざすこと」。コロキウム 4 「教育思想家は「科学 (Wissenschaft)」をどう考えてきたか」(小山裕樹・河野桃子・岸本智典・柴山英樹・小野文生)，教育思想史学会編『近代教育フォーラム』第 22 号、 査読無、255-257.
- ⑨ 小野文生 (2012) 「〈境界〉のラディカリズム——西田幾多郎とマルティン・ブーバーにおける媒介の論理について」。西田哲学会編『西田哲学会年報』第 9 号、 査読有、57-77.
- ⑩ 小野文生 (2012) 「共生の断層を観るために——双極性、比喩、翻訳」。京都ユダヤ思想学会編『京都ユダヤ思想』第 2 号、 査読無、118-126.
- ⑪ 小野文生 (2011) 「ブーバー思想の弁証法的構造、あるいはユダヤ悲劇の根源——『ゴグとマゴグ』における悲劇の歴史のアレゴリーについて」。京都ユダヤ思想学会編『京都ユダヤ思想』創刊号、 査読有、30-56.
- ⑫ 小野文生 (2011) 「マルティン・ブーバーの聖書解釈における〈声〉の形態学——「かたちなきもののかたち」への問いについて」。同志社大学一神教学際研究センター編『一神教学際研究 JISMOR』第 6 号、 査読有、7-35.
- ⑬ Fumio Ono (2011), Morphology of the Voice in the Hermeneutics of Martin Buber. An Inquiry into the Form of the Unformed, in: *Journal for Interdisciplinary Study of Monotheistic Religions* (Center for Interdisciplinary Study of Monotheistic Religion, Doshisha University), vol.6, 査読有、8-36.

⑭小野文生 (2011) 「マルティン・ブーバーにおける言語・時間・力——〈隔たりと分有〉の哲学とは何か」. 教育思想史学会編『近代教育フォーラム』第20号, 査読有、1-22.

⑮小野文生 (2010) 「教育目的論の近代と批判の未来——ポストモダニズムの残照のなかで」. 教育思想史学会編『教育思想史コメンタール』(教育思想史学会20周年記念誌), 査読有、13-32.

⑯小野文生 (2010) 「ウィーンのブーバー／ブーバーのウィーン——神秘主義・ユダヤ・ルネサンス・ニーチェ主義からみる世紀転換期ウィーンの世界史」. コロキウム「ウィーン、その思想的磁場の解説: ユダヤ性、精神分析、科学哲学、教育思想」(丸山恭司・下司晶・小野文生). 教育思想史学会編『近代教育フォーラム』第19号, 査読無、168-172.

[学会発表] (計 23 件)

①Ono, Fumio, Crisis of Tradition and Love for an Unredeemed World: Reading Kafka with Benjamin, Scholem and Buber. International Symposium of the Project of Young Scholars “Theocracy” and “Nation” in Jewish Thought: Past and Present, The Hebrew University of Jerusalem, December 30, 2013.

②小野文生、「形なすものと力——ブーバー＝ショーレム論争への一視角」. 明治大学人文科学研究所・総合研究「模倣と創造——日本とヨーロッパにおける文化継承の現象学」京都セッション(明治大学・同志社大学共催), 同志社大学, 2013年10月19日.

③小野文生、「もろい部分にたつ教育哲学——パトスの知からシステム化／脱システム化の二重運動を考える」. 課題研究「教育実践と教育哲学——これまでの教育哲学、これからの教育学(3)」, 教育哲学会第56回大会 神戸親和女子大学, 2013年10月13日.

④Ono, Fumio, On the “Ordinary” Style of Philosophy and Education. Some Comments to *Education and the Kyoto School of Philosophy*. The 6th International Colloquium between the Institute of Education, University of London, and the Graduate School of Education, Kyoto

University: *Comparative Philosophy as Education: Education and the Kyoto School of Philosophy: Pedagogy for Human Transformation*, Kyoto University, September 23, 2013.

⑤小野文生、「哲学することと翻訳のサブジェクト——和辻哲郎「日本語と哲学の問題」再考」. コロキウム2『自己を超えて』——哲学のサブジェクト転換(齋藤直子、ポール・スタンディッシュ、飯田隆、小野文生、三澤紘一郎), 教育思想史学会第23回大会 慶應義塾大学, 2013年9月15日.

⑥Ono, Fumio, Neubestimmung des Begriffs “Erfahrung” aus dem Blickwinkel vom Wissen des Pathos und von der sprachlichen Wahrheit. Eine Perspektive für die Erziehungswissenschaft. International Forum: *Practical Knowledge and Educational Studies for the Future*, Kyoto University, March 21, 2013.

⑦Ono, Fumio, Poiesis, Weak Thought, the Hyperbolic: Thinking of P. Standish’s *Beyond the Self* with Heidegger and Levinas. International Colloquium: *Crossing Borders Beyond the Self*, Kyoto University, December 23, 2012.

⑧小野文生、「馬場智一氏『倫理の他者——レヴィナスにおける異教概念』へのコメント」. 一橋哲学・社会思想学会合評会・馬場智一氏著『倫理の他者: レヴィナスにおける異教概念』をめぐって, 一橋大学 2012年12月1日.

⑨小野文生、「ポイエシス、弱い思考、誇張法——ハイデガーとレヴィナスと共にスタンディッシュ『自己を超えて』を考える」. ラウンドテーブル3「教育としての哲学」の条件——ポール・スタンディッシュ『自己を超えて』をめぐって(齋藤直子・渡邊福太郎・丸山恭司・小野文生・朱燁・今井康雄), 教育哲学会第55回大会 早稲田大学 2012年9月17日.

⑩ Ono, Fumio, Martin Buber’s Philosophical Investigation into the Morphology of the Voice - His Criticism of J. Wellhausen and the Gestalt-theory. CISMOR, Doshisha University and Hebrew University of Jerusalem, Faculty of Humanities International Workshop: *Interpretations of Traditions: Maimonides, Spinoza, Buber, Levinas and*

the After, the Hebrew University of Jerusalem, Israel, August 27, 2012.

- ⑩小野文生、「Grundの翻訳と模倣——ブーバー＝ローゼンツヴァイクのドイツ語訳聖書をめぐる問題」. 明治大学人文科学研究所総合研究「模倣と創造——日本とヨーロッパにおける文化継承の現象学」, 明治大学, 2012年1月28日.
- ⑪小野文生、「マルティン・ブーバーの聖書解釈における声の形態学——JudaistikとGermanistikの交叉」. 同志社大学一神教学際研究センター・若手研究会「聖典と政治思想」部門主催シンポジウム「マルティン・ブーバーの思想とその聖書解釈の可能性——ドイツとユダヤの間で」 同志社大学 2010年5月15日.
- ⑫小野文生、「マルティン・ブーバーと世紀転換期思想——神秘主義と対話哲学をあわせ読む」. 神戸女学院大学大学院文学研究科比較文化学総合演習(I)(II)主催講演会, 神戸女学院大学, 2012年1月17日.
- ⑬小野文生、「学術大会シンポジウム「ドイツのユダヤ系思想家における「同化」と「ナショナリズム」の問題」へのコメント」(徳永恂・上山安敏・村岡晋一・小野文生・早尾貴紀)、京都ユダヤ思想学会第3回学術大会 京都大学 2010年6月26日.
- ⑭Kellermann, Ingrid & Ono, Fumio, Ein deutsch-japanischer Blick auf das Familienglück. International Workshop between the Free University of Berlin & Kyoto University: "Happiness in Family". An International Comparative Study, Kyoto University, October 12, 2011.
- ⑮小野文生、「西田幾多郎とマルティン・ブーバーにおける媒介の論理——時間と言語をめぐる思索の交叉」. 『善の研究』出版百周年記念事業 2011 国際哲学交流シンポジウム×西田哲学会年次大会・シンポジウム「私と汝」(小坂国継・片柳榮一・小野文生・ロルフ・エルバーフェルト), 西田幾多郎記念哲学館 2011年7月17日.
- ⑯小野文生、「近代精神と古典解釈」という問いかけへの応答——ディルタイの精神科学とブーバーの対話哲学の精神史的交叉からの示唆」. 国際高等研究所研究プロジェクト「近代精神と古典解釈——伝統の崩壊と再創造」(研究代表者: 手島勲矢) 2010年度第3回研究会 国際高等研究所

2010年11月27日.

- ⑰小野文生、「マルティン・ブーバーにおける言語・時間・力——〈隔たりと分有〉の哲学とは何か」. 教育思想史学会第20回大会フォーラム1 日本大学文理学部百周年記念館 2010年9月19日.

[図書] (計 7件)

- ① Ono, Fumio (2014) Morphology of the Voice in the Hermeneutics of Martin Buber. An Inquiry into the Form of the Unformed, Daniel Krochmalnik & Hans Joachim-Werner (Hrsg.) *50 Jahre Martin Buber Bibel: Beiträge des Internationalen Symposiums der Hochschule für jüdische Studien Heidelberg und der Martin Buber-Gesellschaft Heidelberg 2012*, Berlin/Münster/Wien/Zürich/London: LIT-Verlag, 317-349 (学術論文⑬の再録)
- ②小野文生 (2013) 「ユダヤ思想と〈隔たりと分有〉の言語的経験——マルティン・ブーバーにおける翻訳・伝承・対話をめぐる思考」. 森田伸子編『言語と教育をめぐる思想史』勁草書房, 180-233.
- ③小野文生・イングリッド・ケラマン (2013) 「記憶の演出と異世代間で相互生成する幸福——滋賀県米原市の中村家の場合」. 鈴木晶子・Ch.・ヴルフ編『幸福の人類学——クリスマスのドイツ・正月の日本』ナカニシヤ出版, 130-160.
- ④小野文生 (2012) 「崇高なもののかかわり」から考える道徳教育の問いのかたち」. 岡部美香・谷村千絵編『道徳教育を考える——多様な声に応答するために』法律文化社, 74-93.
- ⑤Kellermann, Ingrid & Ono, Fumio (2011) Das Weihnachtsfest als Brückenschlag, In: Ch. Wulf & S. Suzuki (eds.) *Das Glück der Familie. Ethnographische Studien in Deutschland und Japan*, Wiesbaden: Springer VS-Verlag, 73-107.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小野 文生 (ONO, Fumio)

同志社大学・グローバル地域文化学部・准教授

研究者番号: 50437175